

少年の主張

平成26年度 最優秀賞

曾祖母に対して

八百津東部中学校3年 伊藤新記さん



僕には九十四歳になる曾祖母がいて、ここ数年、認知症らしき症状が出ています。家では毎日、「まだごはんを食べていない。」と言いながら、生の食品や店の商品を勝手に食べることが癖になっています。また、耳も不自由で「だめだ」と言っても理解してくれません。そのため何が起こるかわからないので家族が常に家にいる必要があります。

注意してもしっかりわかってくれないし、時間がたつと自分のしたことを忘れてしまって、また食べに来ます。だから家族も、普段は優しく接しているつもりですが、つい声を張り上げたり、強く引っ張ったりします。僕もやや強い態度に出てしまいがちです。必要だと思うからやっているのですが、正直なところ、厳しくし過ぎかな…という後味の悪さをよく感じています。

曾祖母のすることはこれだけではありません。例えば、本のページを破って散らかしたり、僕の勉強中に近づいてきて教科書を指さし、「これ食べられるかね？」などと聞いてきたりするようなことは何度かありました。一番驚かされたのは、家をいつの間にか抜け出して居場所が分からなくなり、みんなで探し回ったことです。近所の小学校の先生からの通報で校庭にいることが分かり、駆けつけました。すると、階段で転んだらしく怪我をしており、顔中あざだらけという状態です。本人は痛がりながらも、なぜそんなことになったのか覚えていない様子でした。僕は悲しくなると同時に、自分の関わり方も悪かったのか、何とかしてあげられなかったか…と途方にくれる思いでした。

そんな中、曾祖母は八百津東部地区にある福祉施設のデイサービスセンターに行き始めました。すると、「今日はデイサービスへ行けるかね？」と、毎日聞いてくるようになりました。地域の方たちと一緒に活動するのが楽しかったり、職員の方が優しく接して下さるのが嬉しかったりするのでしょうか。僕は実際にそこで見たわけではありませんが、毎日職員の方が書いてくださる日記から想像できます。遊んだり外出したりする中で曾祖母に気を配り、接し方も工夫してくださっていることが分かりました。話は耳元ではっきり伝えて下さっています。また、ささいなことでも怒らず、粘り強く接して下さって

ます。

あるとき、学校の行事で別の福祉施設へ訪問する機会がありました。そこでは合唱を披露したり、一緒にお話をしたりして、地域の高齢者の方々とふれあいました。その時は僕も耳元ではっきり話しかけたり、一緒にゆっくり歌ったりして交流を深めることが自然にできました。これはなぜなのでしょう。

みなさん、自分の家族にいつでも「ありがとう」と素直に言えていますか？僕はなかなかできません。僕の、曾祖母に対する態度はこれと同じなのです。あまりに近い存在なため逆に敬意が持ちにくいのです。家の中で手を握って連れていくだけのことが気恥ずかしいのです。知っている家なのだからこままでしなくてもいいやと考えてしまうのです。

曾祖母はかつてとても多才な方で、家業の商売を切り盛りしつつ、そろばん、書道、狂俳などをたしなむ、きりっとした人だったそうです。この家を守ってきてくれた、敬うべき大切な家族なのです。そのことを思うと、近い存在だからこそ曾祖母の認知症についてもっと理解を深め、彼女の立場になってどうすればいいかを考えるべきなのです。現状に慣れてしまうのではなく、すぐに実践しなければいけないのです。

今、日本では少子高齢化が進み、僕の住む地域でもお年寄りの姿が目立ちます。1.3人で一人の高齢者を支える時代が来るとも聞きました。この状況が一変することは難しいでしょう。しかも、曾祖母のような認知症的症状や身体に不自由を抱える方も増加するはず。皆さん、誰に対しても思いやりをもって行動することがいつでもできますか。家族ですら、この意識を持ち続けることは難しいのです。まず、身近なお年寄りにごく自然に明るく、そして人生の先輩としての敬意を持って接する意識を持って下さい。優しく耳元ではっきり話しかけること。これを実行することがその第一歩です。

僕と同じ若い人たちが、お年寄りはもちろん、誰に対しても優しく接することができれば、どんな時代が来ようと、住みよい社会になるはず。僕